名桜大学紀要　2005　Meio Univ., Okinawa pp33 ～ 40

青花碗に描かれた騎馬戦士の氏素性を探る

上　間　　篤

An Inquiry into the Ethnic Background of a Cavalryman Drawn on a Piece of Porcelain Called *Seika*

Atsushi Uema

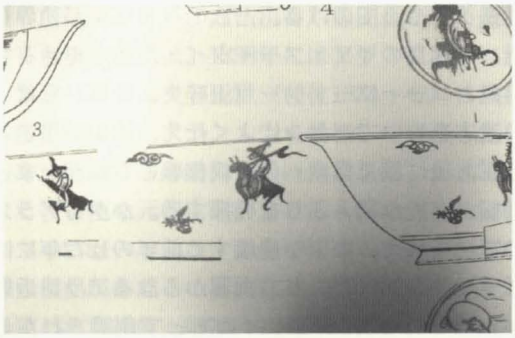
要　約

元朝治下では、あまたの西域出自の騎馬民族が王朝の治安維持と権益の保護を目的として江南地方一帯に配置された。面白いことに、かかる騎馬民族との関わりを彷彿とさせる遺物が、今帰仁城跡から出土した発掘史料の中に散見される。それらの中には、青花と呼ばれる元代の陶器の側面に騎馬の戦士をあしらった図柄なども存在する。本稿は、問題の図柄に看取される携行品を手掛かりにして、この騎馬戦士の氏素性に迫る。

Abstract

In the Yuan Era in China, numerous equestrian peoples from such regions as around the Caspian Sea and Central Asia were employed and stationed in southern China to keep law and order as well as to protect political and economic interests of the dynasty. Interestingly, there exists, among the excavated items from Nakijin Castle, the image of a horseman on a piece of porcelain called *seika* belonging to the Yuan period. This paper intends to trace the ethnic background of this horseman by referring to the items that he carries.

はじめに



上に示した写真の中央に描かれている騎馬の戦士は、今帰仁城跡から出土した陶製品の側面に描かれているものである[1]。この図柄をあしらった器の種類は青花と呼ばれ、その焼成年代は元代であると見なされている。またこの器は、口径が15.9cm、器高が6.5cm、底径が6.6cmの寸法からなる様式を整えた特徴を示す。さて、問題の騎馬戦士の姿格好であるが、それは見ての通り、頭には縁が広くて三角錘の形をした山高帽子を被り、肩には先端に三角旗を結わえた旗棒を担ぎ、足元の鐙のあたりには円形の盾を携行していることが看取される。

ところで元朝は、南宋を制圧して自らの版図を江南地方に拡大するや、治安維持を目的として、彼の地の平定に功績のあった西域出自の騎馬軍団を江蘇・浙江両地方に大々的に配置する。彼らは、征服者側の官軍治安維持部隊の兵士として、元朝末期に至るまで江南地方の各地に駐屯し、防人としての任務にあたる。漢土における西域騎馬民族をめぐるかかる動向や今帰仁城跡の時代的背景を鑑みるとき、問題の器に描かれた図柄は、元代の江南地方に駐屯した然る騎馬民族の騎兵であろうと推察される。以下に、上述において紹介した図柄の特徴を手掛かりにして、この被写体の民族的氏素性に迫ってみることにする。

(I)　南宋計略と西域出自の騎馬軍団

元朝を興して漢土東北部の主となったクビライ（在位1260～94）は、ほどなくして物資の豊かな江南地方の併合に乗り出す。いわゆる南宋計略である。元軍の

総大将として正規軍を率いたバヤン（伯顔）は、キプチャク（欽察）やアラン（阿速）に代表される西域系騎馬軍団を起用して先鋒部隊を組織し、南宋の攻略に乗り出す。バヤンが西域系の騎馬軍団に前線突破の役目を託した背景には、以下に述べる諸般の事情があった。元室内におけるバヤンは、並み居る家臣の中でもとりわけ西域の事情に明るい人物であった。バヤンは、血筋の上ではモンゴル人であったが、彼の人となりは深くイラン文化圏で育まれたものであった。イラン地方の経営を託されたフラーグ（クビライの実弟、イル・カン朝の創始者）が西方へ赴いたおり、バヤンの父ジャグータイもその軍勢の一員としてイランへ向かう。その父の後を追ってイランへ渡ったバヤンは、イル・カン朝下で多感な時期を過ごして成長し、やがてはフラーグに仕える身分と地位を得る。バヤンのかかる経歴を見れば、彼がペルシャ語（元朝期の東アジアにおける国際語）にも造詣を深めた人物であったことが分かる。このバヤンが、フラーグの使臣として元朝を訪れるのは、13世紀の中葉のことである。クビライは、バヤンが元朝の国策に資する人材であると見抜くや、彼を漢土に引き止めることに意を尽くす。一方、バヤンもクビライの切なる意向を真摯に受け止め、遂には元朝に留まる決意をする。クビライが南宋を併呑するにあたり、かかる出自と経歴を有したバヤンを自軍の最高司令官に抜擢したことは、元朝に仕えたあまたの西域系民族の元室に対する忠誠心に少なからぬ影響を及ぼしたものと考えられる。繰り返すが、南宋攻めに際し、元朝正規軍の先鋒隊を担ったのは、当時漢人系の人々からは色目人と呼ばれていた西域出自の遊牧騎馬民族であった。バヤンがかかる民族を先鋒隊に起用したことは、南宋掃討作戦の前段階において、彼がモンゴル・ウルスの伝統的な戦術なるものに精通していたことを窺わせる。カスピ海西方のカフカズ山系北麓のアラン族を始めとする諸民族がモンゴル・ウルスに臣従するのは、13世紀の30年代末期（モンゴル王朝第二代皇帝オゴデイ、＜在位1229～41＞、は父チンギスの遺志を継いで西方へ軍を進める）に遡る[2]。彼の地の諸民族を平定するに当たり、モンゴル軍は漢人兵士を先鋒隊に投入して戦いを展開する。東方出身の漢人兵士が先鋒隊に起用されたのは、彼らに前線からの離脱を許さない戦術上の方策であった。バヤンが、南宋攻めを敢行するにあたり、色目系の騎馬軍団を先鋒隊として正規軍の最前列に配置したのは、かかる戦術上の前例を踏まえた戦略であったと考えられる。

さて、南宋に対する掃討作戦においては、あまたの西域出自の民族が元朝軍の主力部隊の前線にあって活躍し、幾多の軍功を立てる。以下に、アラン族出自のエリア・パートゥー・エル（也烈拔都兒）とその子孫たちの働きを追い、その諸相の一端を紹介する。一族の祖エリア（カフカズ山系北麓の出身。血筋は阿速とも呼ばれたアラン系で、この一族はオゴデイが差し向けたモンケ率いる軍勢に降伏する。降伏後に組織されたアランの精鋭部隊はモンケの軍勢に従って東方へ移動し、途中モンゴル・ウルスの本陣を経て漢土に送り込まれる）は、虎と格闘してそれを仕留めたとされる豪胆談でも知られる人物である[3]。モールの記述によれば、エリアは襲いかかる虎をひねり倒し、その舌を鷲づかみにするや、短刀で応戦して猛獣を仕留めたのだという。真相はともあれ、この武勇談には、アラン族が誇りとした尚武の精神が活写されていて面白い。ところでこのパートゥー・エルなるモンゴル風の名前であるが、それにはある意味合いが込められているようである。まずパートゥーであるが、それはモンゴル語で「頑強な」を意味する形容詞であり、他方、エルは「男」を意味する名詞である。ならばパートゥー・エルは、「強靭な武人」を意味する尊称の類であったと解されるが、それは、とりもなおさず、上に紹介したエリアの武人像をものの見事に表出するものでもある。元軍が平時に実施した軍事教練では、兵士は時として、解き放たれた虎などを相手に戦うこともあった。それは兵士の士気や戦闘能力の養成をはかる一環として行われた。武人エリアの武勇談は、かかる軍事訓練との関連も指摘されて面白い。ところでエリアは、揚州での攻防戦において戦死したと伝えられる。また後の常州攻めにおいては、アランの先鋒隊の一部が、酒を振舞う南宋側の策略にはまり、不意討ちを食らって全滅するという事件が発生する。それに激昂した元朝軍は、常州に包囲網を敷いて一斉攻撃を仕掛け、町中の住民をことごとく惨殺してしまうという手荒なことをやってのける。一族の祖エリアが他界した後も、二代目のイェ・スー・タイ・エル（也速歹兒、長男）とユー・ワー・シー（玉哇失、次男）らは、父親の遺志をついでバヤンによく仕え、南宋の平定のみならず、後に続く雲南への侵攻作戦にも軍団を率いて参加し、有能な武人ぶりを発揮する。かかるアラン人士の軍功を称え、南宋が崩壊する前年の1272年には、クビライの命により、左右両翼からなるアラン近衛部隊が創設される[4]。クビライのもとで創設されたこの近衛部隊は、元朝が崩壊する寸前まで存続し、元朝と運命を共にする。既述で触れたように、南宋平定後もエリア家とその配下の軍勢は江南地方に踏みとどまり、元朝の国策を擁護する任務に当たる。彼らが治安維持を担当した任務地は浙江地方であった。元朝にとってこの地方は、王朝の食料を賄う最も重要な食料供給地であった。1320年代にこの地を旅したカトリックの修道士オドリコ・ダ・ポルデノーネは、この地の杭州に有力なキリスト教徒勢力が存在したことを伝え

ている[5]。このキリスト教徒勢力が、エリア家とその配下のアラン軍団であったことに疑念をはさむ余地はなかろう。元朝配下のアラン族は、異郷の地の漢土においても、ギリシャ東方教会の流れを汲む先祖伝来のキリスト教を守り抜いていた。因みに、クビライが他界（1294年２月）した直後には、フランシスコ修道会の僧侶モンテ・コルビノが元朝に到着する。モンテ・コルビノは、クビライの要望に応えて、アヴィニョンの教皇庁が特使として元朝へ送り出した人物であった。クビライはモンテ・コルビノと直に合間見えることはなかったが、クビライの後継者テムル（成宗、在位1294～1307）はモンテ・コルビノの来朝を歓迎し、彼に布教のための給金をも支給して彼の布教活動を支える。以後モンテ・コルビノは、1328年に漢土で永眠するまでの24年間に渡り、彼の地にカトリックの信仰の種を播いて一生を送る。その間モンテ・コルビノは、元室に仕えて栄達の道を歩んだアラン人士、すなわちフーティム（福定、アラン王家五代頭首、知樞密院事）[6]、カティセン（香山、フー・テイ・ライ・ツー家四代頭首、武宗ならびに仁宗に仕え、衛都指揮使としてアラン左翼近衛部隊を統率）[7]、ゲンボガ（者燕不花、ニエ・クラ家四代頭首、武官の人事や軍事訓練ならびに兵馬・軍装備・兵器に関する諸事を司る兵部尚書や財務を扱う大司農丞などの役職を兼務）[8]らと親交を深め、やがては彼らの信仰上の薫陶者として重要な役割を担うことになる。モンテ・コルビノが他界した後、既述のアラン人士の面々らは、モンテ・コルビノの後任を嘆願する署名入りの懇請書を作成する。彼らの要望を受けてトゴン・テムル（順帝、在位1333～70）は、モンテ・コルビノの後任人事の要請を目的とした使節団をアヴィニョンの教皇庁へ派遣する。フランシスコ修道会の僧侶アンドレア（仏出身）を団長とする総勢15名からなる使節団は、1338年にはアヴィニョンに到着し、教皇ベネディクト12世（在位1334～42）に謁見する。使節団には、アラン人士を代表して者燕不花らの姿もあった。彼らの訪問を受けた教皇は、早速32名からなる答礼使を元朝に遣わすことを決め、その団長には、マリニョーリとファン・デ・フロレンシアという二人の僧侶があたることになる。1338年にアヴィニョンを発った答礼使一行は、1342年にはハン・バーリク（現北京）に到着し、その後３年の月日を元朝の都で過ごした後、帰途は、江南の泉州を船出し、東南アジア、インド、中近東方面を経由してヨーロッパに戻る。答礼使一行は、1353年にアヴィニョンに帰着する。

さて上述の外交交渉が元室において進展を見る中、元朝の財政を支え、食料の供給基地としての役割を担っていた江南地方の各地では、元朝の屋台骨を崩壊に導くこととなる反元勢力の台頭を見る。これらの反元勢力を率いたのは、沿海の海寇勢力を束ねた方国珍、塩徒の衆を率いた張士誠、紅巾の衆を巧みに操った朱元璋（後に明朝を興して洪武帝を名乗る）らであった。彼らの中で、浙江地方の色目系治安維持部隊と直接に相対峙したのが、1330年代から40年代にかけて浙江東端の台州、慶元（寧波周辺）、温州などを支配下に置き、そこに元朝とは一線を画す独自の政権を樹立した方国珍とその傘下の勢力であった。「方国珍政権の性格」と題した論文を著した寺地遵は、その論文の註において、方国珍と対峙した元側の官公吏や武将たちについて、実名を挙げて次のように紹介している。

徳流チ実、朶児只班、帰暘、泰不花、孛羅帖木児、薫搏霄、達識帖木児、尹三珠、答納失里、納麟、黒的児、帖里帖木児劉基、阿児温沙、宋伯顔不花、趙宜浩、善山、納麟哈喇、陳文昭、高昌帖木児、禿堅見、邁里古思、黄中、拜住哥[9]

元朝下の身分制度においては、モンゴル族が社会の頂点に支配層として君臨し、その下に色目系民族が陣取って漢人系の人々を支配した。中でも江南地方の人々は、社会の最下層の民として扱われ、彼らには官職に就く道さえも絶たれていた。上記の人名リストは、元側の守臣や武将らが、漢人系以外の人々であったことを示す事例であるが、それらの人名中には、趙宣浩や陳文昭などといった漢人系の名前も散見される。名前の特徴から漢人系と判断されるそれらの人物は、恐らく華北の出身者であったろう。漢人系とはいっても華北人は別格で、彼らには官職に就く道も開かれていた。ところで、引用した人名リストのしんがりに登場する拜住哥なる人物は、本稿の論旨との関わりにおいて、見過ごしてはならない人物である。バヤンに仕えて南宋征討に活躍したエリア家の人々についてはあらかじめ触れておいたが、この門閥の家系図を参照すれば、初代のエリアを筆頭に、二代目には也速歹兒（イェ・スー・タイ・エル、長男）と玉哇失（ユー・ワー・シー、次男）、三代目には亦乞里歹兒（イー・チー・リー・タイ・エル）、そしてしんがりの四代目には拜住（パイジュー）といった面々らが登場する[10]。四代目の拜住の時代に至り、その配下の軍勢が、既述の通り、方国珍の勢力と対峙して駆逐されたことから、その後のエリア家の諸事を伝える家系図は存在しない。上に紹介した寺地の論文は、1320年代の後半期から40年代に至るあたりを時代背景とするものである。当時拜住は、阿速前衛親軍千人隊長として、自らのアラン（キリスト教徒）軍団を率いて浙江地方の治安維持に奔走していた。かかる状況証拠を踏まえれば、寺地の人名リストに登場するこの拜住哥なる元側の守臣は、エリア家四代目の頭領・拜住その人に相違ないと判断される。因みに、拜住なる名前が漢人系の呼称で

ないことは明白であるが、面白いことにこの名前の後尾に現われる哥なる文字は、中国語で義兄弟の意に用いる言葉である。ならば江南の地にあって拜住は、一族郎党の者から、尊崇の意を込めて、「パイジュー兄様」と呼ばれ、慕われていたものと推察される。

(II) モンゴル・ウルスとフランシスコ修道会

西欧のキリスト教社会が、モンゴル・ウルスの動向に畏怖の念を抱き始めるのは、モンゴル皇帝オゴデイ（在位1229～41）が1230年代の末期に父チンギスの遺志を継いで敢行した西域親征に呼応して、バトゥ（チンギスの長子ジュチの息子）配下のキプチャク人などからなる精鋭部隊が、遥か西方のボヘミアやポーランドのあたりにまで軍事侵攻を行ったことに端を発する。ただならぬ事態に直面したヨーロッパのキリスト教社会は、急遽その対策に迫られるが、当初は時の皇帝フェデリッコ二世と教皇グレゴリオ九世（在位1227～41）との間に生じた不和が足かせとなり、ヨーロッパが一枚岩となって防衛網を張り巡らすまでには至らない。かかる危機的状況の中で立ち上がるのが、グレゴリオ九世の跡を継ぐイノセント四世(在位1243～54)である。新教皇は迫り来る危機を回避する方策として、手始めにドミニコ修道会とフランシスコ修道会に呼びかけて医療に従事する衛生僧を募り、彼らを北東ヨーロッパやアジア各地の異教徒の世界へ送り込む。フランシスコ修道会は、教皇庁のかかる布教戦略に則り、当時ガザリアの名称で知られていたクリミア半島に伝道の拠点を設け、独自に活動を展開する。クリミア半島は、かつてその北側に位置するアゾフ海の豊かな海産物を介して、古代ギリシャの都市国家とも縁薄からぬ関係にあった土地柄であるが、13世紀の中葉には、イタリアのジェノバ、ピサ、ベネチア出身の商人たちが、この地を経由してキエフ（現ウクライナ共和国の首都）のあたりにまで交易を目的として進出していた。マルコ・ポーロの父ニコロなども、初めはかかる交易ルートで商いに従事した一人であった。因みにこのニコロを元朝へ赴かせたのは、かの南宋計略を指揮したバヤン将軍その人であったと伝えられる[11]。話は戻り、当時ガザリアを拠点に活動したフランシスコ修道会の僧侶たちは、宣教活動に専念する傍ら、一方では上に述べたイタリア商人たちを精神的に薫陶し励ます存在でもあった。13世紀の中葉にフランシスコ修道会が、他の修道会に先んじて南ロシアのジュチ・ウルスやその東方に連なる中央アジア一帯の地理や文物に造詣を深めることとなったのは、この修道会が教皇庁の布教方針に沿って早くからガザリアの周辺地域で宣教活動に従事していたからに他ならなかった。

ひるがえって、バトゥ、バイダル、カダン、スベテイなどに率いられたアジア系騎馬軍団は、1341年を迎える頃には、ヨーロッパの奥深くにまで侵攻する。ところが明けて1342年を迎えると、剽悍さを売り物とした遊牧民の軍勢が、あたかも引き潮のごとくコーカサスへ取って返す。この退却劇は、オゴデイが死去したことによる帰還命令に服して敢行されたものであった。皇帝が他界した際のモンゴル・ウルスでは、その寵臣はもとより、下々の臣民にいたるまで遍く喪に服すことが求められた。西方のジュチ・ウルスを率いたバトゥといえども、皇帝の死去に伴うこの慣行には従わざるを得なかったのである。オゴデイが死去したことにより、アジアの遊牧騎馬民族がヨーロッパで展開した軍事行動は、中途で雲散霧消することとなった。

さて、東方のモンゴル・ウルスがオゴデイの崩御に伴い後継者の問題に揺れていた頃、西方のヨーロッパでは、即位したばかりの教皇イノセント四世が、モンゴル皇帝に宛てて親書をしたためる。教皇は、フランシスコ修道会から二名の僧侶を抜擢して親善使に任命し、各々に親書を託してモンゴル・ウルスへ派遣する。この大役を仰せつかるのが、以下に少しく紹介するカルピニとルブルクである。重大かつ命がけの任務を拝命した両人は、以後それぞれに自らの信心、知識、人脈、縁故などを駆使して、中央アジアのモンゴル・ウルスを目指す旅に挑む。

カルピニは、1245年の復活祭の日に仏国のリヨンを発ち、一路北東ヨーロッパの内陸部を経てモンゴル・ウルスの本陣へ向かう。途中あまたの災難に見舞われながらも、遂にはカラコルム北方に陣を張る皇帝グユク（在位1246～48）のお膝元に到着する。しばしの逗留を経てグユクとの謁見に臨んだカルピニは、居並ぶ寵臣の一人を介して、カトリックの教えに帰依することを諭した教皇の親書を奉呈する。役目を果たし終えたカルピニは、旅立ちから２年を経た1247年にはリヨンに戻る。その後のカルピニは、旅先で自らが経験したり見聞したりした事柄を報告書にまとめて任務を終える[12]。

一方、ルブルクが同様の任務を拝命するのは1253年のことである。彼は旅を立案するにあたり、前任者の経験や見識を参考にはしたものの、安易にそれらをなぞるようなことはしなかった。ルブルクは、アジア内陸部への旅に先立ち、しばらくコンスタンチノープルに逗留し、彼の地でアルメニア出身の聖職者や商人たちと接触を図り、モンゴル・ウルスに関する様々な情報の収集に専念する。その間、折を見て小アジアやエジプトへも足を運び、アラビア語とモンゴル語の習得に励む。また彼は、机上の文献資料にも注意を払い、必要とされたあらゆる知識の獲得に努めた。ルブルクが旅立ちにあたり、あらかじめ身につけていたとされる黒海周辺ならびに中央アジア一帯の地理や文物に関する知識は、彼が日頃から座右の書とした聖イシドー

ロ（七世紀にセビリアの大司教の座にあったスペインの碩学、560？～636）の著書 *Etimologías* に負うものであった。かかる周到な準備を経てルブルクは、先に述べたガザリアを経由して、カラコルム近郊に陣を張る皇帝モンケ（在位1251～59）の本陣を目指す。ルブルクも旅にあっては、筆舌に尽くしがたい困難と危険に遭遇するが、コーカサス平原から以東へはサルタク（バトゥの息子）が差し向けた案内人を立てて旅を続け、いくつものジャムチ（馬を用いた駅伝制度）を乗り継いでモンケの宿営地に辿り着く。モンケに親書を奉呈し終えたルブルクは、帰途に臨み、前任者が辿った北方の内陸ルートを避け、自らは南回りのルートを選択する。彼は、先ず西進してコーカサス平原へ向かい、そこにさしかかる辺りで南へ折れ、一路アラン族の住むカフカズ山系東麓の丘陵地帯を右手に見ながら、カスピ海の西岸部をイラン方面に向かって南下する。その後は、かの地下都市で知られたトルコのカッパドキアなどを経由してヨーロッパに戻る。ルブルクも帰還後には、カルピニと同様に、旅の経緯をラテン語で書き記し、教皇庁へ報告する[13]。ルブルクが著したこの見聞録は、13世紀中葉の中央アジアに関する情報を満載した宝船のようなもので、今もって読者を引きつけて止まない魅力に満ちている。

ところで思いもよらぬことに、ルブルクが著したこの貴重な見聞録の中に、本稿の冒頭で紹介した騎馬戦士の氏素性の解明に一役買うと判断される事柄が扱われている。ルブルクの見聞録をラテン語から英語に訳した人物は、William Woodville Rockhill という、中央アジア史に造詣の深い研究者であるが、彼が原著の内容を補完・補正する目的で脚注に書き添えた関連の情報は、一冊の学問書が出来上がるほどの内容を誇る。以下にロックヒルが伝える情報の一端を紹介し、冒頭で触れた騎馬戦士の氏素性に迫ってみることにする。

> After every rain they found (in the beds of the streams?) a kind of iron called *kia-sha*, which could be made into weapons of extraordinary temper, and which they usually gave to the T'u-küeh (Turks) as tribute. Men were few among them, as compared to women. They wore earrings. The men were brave. They had tattoo-marks on their hands, and the women when they married had them made on the nape of the neck. They lived together promiscuously. Their arms consisted of bows and arrows, and they carried flags and pennons. They made shields of split wood, long enough to cover a horseman to the ground, and had other smaller round ones, reaching to the shoulder, to ward off arrow and sword blows.[14]

さて、引用したロックヒルの記述には、かつて弓矢で武装し、腰から肩までを覆い隠すことの出来る円形の盾を携帯し、ペノンと呼ばれる三角旗を結わえた旗棒を持ち歩くキルギス族のことが記されている。そもそもキルギス族は、バイカル湖の西方、すなわちエニセイ川の源流域を故地とした民族集団であった。ロックヒルが中国の文献やペルシャ語の文献に基づいて記したと判断される記述によれば、周辺の諸民族と混血を重ねる以前のキルギス族は、赤毛の頭髪と緑色の目をした、総じて身長の高い人々であった。かつて彼らは、エニセイ川源流域の川床で採取した鉱石（砂鉄と判断される）を原料として鏃やその他の軍装品を製作し、完成品の一部は、近隣の民族に献上品として貢納することなども行っていたようである。村上正二によれば、キルギス族のこの冶金技術は、西方のミスシンスク冶金文化の影響を受けたものであったらしく、この冶金文化の影響が南方のチュルク族に及んで、突厥（6世紀の中葉から200年に渡り中央アジア一帯に君臨）の勃興を促す要因になったのだという[15]。ひるがえってロックヒルの記述は、キルギス族の装飾的嗜好に関しても触れていて面白い。それによれば、彼らは、男女を問わず、身体に刺青を施し、また彼らの中では、男性でも耳にイアリングをはめることなども行われたようである。刺青を施すにあたっては、男性は手の甲に、女性は既婚後に首のうなじにそれを刺したのだという。一般にキルギス族の男性には尚武の気質が顕著に見られたというが、その一方で、彼らの社会は、男女の人口比率において、女性がことのほか多数を占めるという不可思議な様相を呈していたことでも知られる。その原因が遺伝的な要因によるものであったのか否かについては判然としない。かかるキルギス族が歴史の表舞台に登場するのは、9世紀の中葉のことである。その頃に彼らは、版図の拡大を目指して自ら南方の高原地帯へ撃って出る。南方のウイグル族などを併呑した彼らは、その後約1世紀に渡りモンゴル高原一帯をその支配下に置く。さて、話は戻るが、引用したロックヒルの記述は、古のキルギス族には円形の盾とペノンを結わえた旗棒を持ち歩く慣行があったことを伝える。この円形の盾とペノンの組み合わせは、三角錘状の山高帽の特徴を除き、本稿の冒頭に紹介した騎馬の戦士の図柄とものの見事に一致する。

ところで、元朝政府は、南宋平定後に王朝の経済を支えることとなった南北間（大都～浙江間）の交通路の要衝に、あまたの西域出自の騎馬軍団を配置し、彼

らに王朝の行方を左右する国防の任務を託した。これらの軍団がどの程度の規模を誇るものであったのかについて、中国の歴代官制制度を研究した和田清は、「(中略)これを見るとき三十七翼の中三十一翼迄が揚子江沿岸に配置せられたのであり、殊に江淮のデルタ地帯には二十翼の萬戸府が集中せられ、また北支那の大都より杭州、平江（蘇州）慶元（寧波）を結ぶ元朝の経済的大動脈の線に沿って兵力の多い上萬戸府が配置せられてゐたことを知りうるであろう。即ち江淮地帯とこの経済的大動脈が元朝では軍事的に重要視され特に強大な軍備がなされてゐたのである」、と述べている[16]。文中に現われる三十七翼とは、江南地方全域に配置された元軍の守備隊の数をいうのであるが、なんとその内の三十一翼までが浙江行省を含む揚子江（長江）のデルタ地帯に配置されていたというのである。因みに、引用に登場する上萬戸府とは、7000人以上の兵力からなる部隊のことをいう。これらの事実を踏まえれば、杭州を本拠地とした拜住配下のアラン部隊なども相当の兵力を誇る騎馬軍団であったことが判明する。杭州は、この地方の物資の集積地として、浙江行省の中ではとりわけ重要な地位にあった。因みに、モールは、元末のアラン人の人口が３万人余に達していたことを伝える[17]。元朝に仕えた色目系人の中には、モンゴル人がオルス人（斡羅思）と呼んだロシア人らも含まれていた。そのことについて、村上正二は、「元朝治下ではモンケ・カンの麾下に収容されたキプチャク、アラン人などとともに、多くのオルス人が捕虜となって漠南の地に移植させられた。元末には宣忠斡羅思親軍都指揮使司の下におかれて、元朝兵力の一翼を担った」と述べている[18]。さて、問題のキルギス族であるが、彼らは漢代の頃から中国の文献に登場するとされ、元史には「乞里乞里」の音写表記で現われる。既述の考察を踏まえれば、彼らもまた他の色目系集団と同様に、長江沿いのデルタ地帯かあるいはその南方に位置する浙江省のあたりに配属されていたものと推断される。彼らは、おそらくオルス軍団かアラン軍団のいずれかに帰属していたものと考えられるが、彼らの尚武的気質やその冶金術といったものを鑑みるとき、彼らを最も魅了しそして惹きつけた民族集団は、尚武の鏡と謳われたアラン族であったのではあるまいか。元来アラン族は、戦闘の最中に潔い死を遂げることを誇りとした文化的性格（スキタイ文化に由来）に彩られた民族で、彼らの集団内（本来彼らの社会には奴隷制度は存在せず、彼らに帰順する者は養子縁組の儀式を経て迎え入れられた）には、かかる文化の性格に賛同する様々な種族の出身者が集っていたとされる。さて、これまでの考察結果を踏まえて判断するならば、本稿の冒頭に紹介した騎馬戦士の図柄は、かつて元朝に仕えて江南地方に闊歩したキルギス戦士の出で立ちを描いたものに相違ないと解釈される。

おわりに

14世紀の中葉から15世紀の初頭にかけて今帰仁城に居を構えた武装勢力との関わりが指摘される出土品の数々は、元朝に仕えて活躍した色目系騎馬軍団の文化的性格を濃厚に反映する趣を帯びている。それらは、食糧残滓としての麦の炭化粒に始まり、左回転式の石臼、遊牧騎馬民族の軍装備の系譜に属すると判断される鑿状鏃、祭祀用であったと推察される精巧な出来栄えの三角ヤジリ（骨製）、片方に円形の穴が穿たれた短冊状の携帯用石製ヤスリ（内モンゴル地方で類似のものが出土）、鉄製の短刀類の数々（ユーラシア大陸の騎馬遊牧民は、総じて名うての短刀使いであったことで知られる。エリアの虎退治の武勇談を参照）、郭内の集団がナルド（ペルシャのササーン朝期に考案された陣取り遊び）に興じていたことを窺わせるサイコロと小円形の石駒、中央に小円形の穴が穿たれた円盤状の石版（重量は300ｇで、錐を回転させる仕掛けの一部であったと考えられる。出陣にあたり、モンゴル軍団の兵士が装備しなければならなかった七つ道具の一つ）[19]、匠の技が冴える鉄製のハサミ（ウランバートルの国立歴史博物館に収蔵されている大モンゴル時代のハサミ類と瓜二つ）、豹紋碗（陶器に豹紋を描く伝統はイランに始まり、その歴史は紀元前４千年紀に遡る）[20]、スタンプとしての用途が考えられる異色の凸型状卍紋（卍紋は古来ユーラシア大陸の騎馬遊牧民に広く信仰され、悪霊払いに力を発揮するとされた。因みに、卍紋様の起源は石器時代にまで遡り、その源郷はモンゴル高原西部地域に比定されている）、ギリシャ十字を彷彿とさせる縦横同長の十字架紋（その中心には騎馬文化との関わりを滲ませる四つ葉のクローバー、＜クローバーは別名うまごやしとも呼ばれ、馬の飼育に最良の牧草。バルカン半島・小アジア原産＞、とその花紋が配されている）、などに及ぶ。尚、十字紋は中世今帰仁の後期武装勢力にとって格別のものであったらしい。この勢力最後の領袖攀安知が所有していたとされる刀剣千代金丸（後世の命名による）の鐔に透かし彫りにされた四葉のクローバーの十字紋やその傍らにあしらわれたクローバーの花紋、ならびに『中山世譜』が伝える攀安知最期の行状（霊石に刀で十字を切刻し、自刎して果てる）などは、そのことを如実に物語る。

さて、先行研究は、元末・明初の江南地方で外国人の排除を求める動きが熾烈を極めたことを伝える[21]。漢人を主体とした国づくりを標榜した明朝は、その初期において、元朝期にモンゴル人や色目系人に支配された経験を踏まえ、海禁政策という対外政策に打って出る。それは、内に向かっては海外との自由な交易活動を禁止するものであった。元末・明初の江南地方に

吹き荒んだ攘夷思想を鑑みるとき、上に紹介した出土物の数々は、単なる交易の視点で扱われてはならない様相を帯びていることが解る。このたびの考察で判明したキルギス戦士の図柄を含め、上に少しく紹介した騎馬文化ゆかりの品々といったものは、15世紀の初頭に尚巴志の軍勢に潰されてしまった今帰仁の後期武装勢力なるものが、在来の土豪勢力とは一線を画す渡来系の武装集団であったことを雄弁に物語る。中でも、名刀・千代金丸、卍紋を含む数種の十字紋、騎馬戦士が携行した短冊状やすり、短刀類、鑿状の鏃、武人たちがナルドに興じていたことを窺わせるサイコロや石駒といったものの存在は、14世紀の後半期に今帰仁城に陣取った武装勢力の氏素性を解明する有力な手掛かりになろう。因みに、明初の詩撰集の一つである『歸田詩話』には、次のような事柄が述べられている。

丁鶴年回回人至正末方氏據浙東深忌色目人
鶴年畏禍遷避無常居有句云行蹤不異梟東徙[22]

これを参照すれば、元末の乱世には、西域出自の色目人のみならず、蒲一族に代表されるペルシャ湾岸出身の回回人（イスラム教徒）らも方氏（方国珍配下の勢力）の迫害から逃れ、浙江沿岸部から東方の彼方へ逃避して行ったことが解る。丁（ウディン）姓を名乗るこの鶴年なる人物の氏素性がそのことを知らしめる。一方で、この逃走劇は、14世紀前半期の浙江沿岸地域の住民が、東方の海原に浮かぶ奄美や沖縄の島々の存在について、かなり詳しい情報を共有していたことを窺わせる内容を孕んでおり、すこぶる興味をひく。それはともかくとして、1368年には、13世紀の中葉から約１世紀に渡り、中華本土にとどまらず、広くユーラシア大陸をも席巻した元王朝が瓦解へと追い込まれる。その結果、騒乱の巷となった江南地方では、彼の地に踏みとどまっていた色目系の兵士やその家族らが路頭に迷い、挙句の果ては寄る辺を失って歴史の闇に葬られる。つとに元朝下の江南地方に駐屯したキルギス族といえども、元末の彼の地に吹き荒んだ排外主義の嵐には抗しきれず、ついには歴史の表舞台から姿を消すことになる。かかる意味において、今帰仁城跡から出土した異色の騎馬戦士の図像は、元朝に仕えた在りし日のキルギス戦士の面影を今に伝えるものとして、世界にも類例をみない貴重な考古学史料であり、文化遺産であるといえよう。尚、本稿の内容に沿って判断するならば、考察したキルギス戦士の図柄をあしらった青花碗は、南宋期の杭州に設立され、宮廷御用品の青磁碗などを焼成した「南宋官窯」の技術的流れを汲む陶工によって製作されたものであったと見なされる。最後に、本稿で紹介した中世今帰仁の武装集団にゆかりの発掘史料は、元王朝に仕えて長江以南の浙江地方に配属されたアラン（阿速）近衛部隊との関わりを強く滲ませる特徴を帯びている。従って、14世紀の後半期に今帰仁城に居を構えた武装集団の氏素性を解明するにあたっては、パートゥー・エルを初代の頭領としたこの兵団に関する研究が不可避になるのは必至と見られる。

注

1 『今帰仁城跡発掘報告 II』、今帰仁村教育委員会、1991年、214頁。
2 V. Minorsky, *The Alan Capital Magas and the Mongol Campaigns*, 1952, p. 226.
3 A. C. Moul, *Christians in China before the Year 1550*, 1930, p. 263.
4 Moul, op. cit., p. 261.
5 江上波夫、『アジア文化史研究』、東京大學東洋文化研究所、1967年、350頁。
6 錢竹汀 / 黄鐘識『元史氏族表二』、1801年（嘉慶十一年）、207頁。
7 錢竹汀 / 黄鐘識、前掲書、208頁。
8 錢竹汀 / 黄鐘識、前掲書、209頁。
9 寺地遵、「方国珍政権の性格」、『廣島史學研究曾編』、223号、1999年、40頁。
10 錢竹汀 / 黄鐘識、前掲書、207頁。
11 マルコ・ポーロ、『東方見聞録１』、愛宕松男訳注、東洋文庫、1994年、10頁。
12 カルピニがラテン語で記した見聞録は、以下のタイトルで英語にも翻訳されている。*The Journey of Friar John of Pian De Carpine to the Court of Kuyuku Kahn, 1245-1247, as Narrated by Himself.*
13 ルブルクの見聞録も以下のタイトルで英訳が存在する。
The Journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the World, 1253-55, as Narrated by Himself.
14 Rubruck, op. cit., p. 197.
15 『モンゴル秘史３』、村上正二訳注、東洋文庫、1976年、98頁。
16 和田清、『支那官制發達史（上）』、中華民国法制研究会、1942年、366頁。
17 Moul, op. cit., p. 254.
18 村上、前掲書、300頁。
19 ドーソン、『モンゴル帝国史２』、佐口透訳注、平凡社、1994年、34頁。
20 R. Ghirshman, *IRAN*, Penguin Books, 1965, p. 36.
21 桑原隲蔵、「蒲壽庚の事蹟」、『桑原隲蔵全集第五巻』、岩波書店、1968年、238頁。

22 『歸田詩話下』、瞿佑　撰、1466年（成化二年）、18頁。

引用文献

Ghirshman, R. IRAN. Maryland: Penguin, 1965.

The Journey of Friar John of Pian De Carpine to the Court of Kuyuku Kahn, 1245-1247, as Narrated by Himself. Trans. William Woodville Rockhill. London: The Hakluyt Society, 1900.

The Journey of William of Rubruck to the Eastern Parts of the World, 1253-55, as Narrated by Himself. Trans. William Woodville Rockhill. London: The Hakluyt Society, 1900.

Minorsky, V. *The Alan Capital Magas and the Mongol Campaigns. Bulletin of the School of Oriental and African Studies* XIV. London: U of London, 1952.

Moul, A. C. *Christians in China before the Year 1550.* NY: Macmillan, 1930.

江上波夫　『アジア文化史研究』　東京大学東洋文化研究所　1967 年。

桑原隲蔵　「蒲壽庚の事蹟」　『桑原隲蔵全集第五巻』　岩波書店　1968 年。

『歸田詩話下』　瞿祐　撰　1466 年（成化二年）。

錢竹汀 / 黄鐘識　『元史氏族表二』　1801 年（嘉慶十一年）。

寺地遵　「方国珍政権の性格―宋元期台州黄巖県事情素描第 3 篇」『廣島史學研究曾編』223号　1999年。

ドーソン　『モンゴル帝国史 2』　佐口透訳注　平凡社　1994年。

『今帰仁城跡発掘調査報告 II』　今帰仁村教育委員会　1991年。

マルコ・ポーロ　『東方見聞録 1』　愛宕松男訳注　東洋文庫　1994年。

『モンゴル秘史 3』　村上正二訳注　東洋文庫　1976年。

和田清　『支那官制發達史（上）』　中華民国法制研究会　1942年。

引用文献以外の参考書目

Álvarez Peña, Alberto. *Simbología mágico-tradicional.* Gijón: Picu Urriellu, 2002.

Bachrach, Bernard S. *A History of the Alans in the West.* Minneapolis: U of Minnesota Press, 1973.

Rostovzeff, M. *Iranians and Greeks in South Russia.* Oxford: Clarendon, 1922.

愛宕松男　「朱呉国と張呉国―初期明王朝の性格に関する一考察」　『東北帝國大學文化會編輯』159号　1953年。

奥崎裕司　「元末方国珍の乱前史」　『茅茨』 3 号　青山学院大学東洋史会　1987年。

清水泰次　「明初における臨濠地方の徒民について」　『史學會雜誌』第五十三編十二号　1942年。

増田精一　「佩石」　『Museum』34号　1954年。

増田精一　「石臼の出現と漢代の東西文化交流」　『Museum』93号　1958年。